

月	火	水	木	金	土
		9:00 ↓ Child Psycho- pathology and ↓ Behavior Disorders 11:50			9:00 ↓ ASL IV 11:50
			13:00 ↓ Psychological ↓ Development I 15:50		
		17:00 ↓ Principles of ↓ Statistics 19:50			

1. Child Psychopathology and Behavior Disorders (3単位)

学齢期に見られる精神病と行動障害の特徴、原因、対応法などについて学んだ。まず先生による講義、必要に応じて質疑応答や議論を行い、最後に症例を用いて診断の練習をした。毎回指定された範囲のテキストや資料を読み、興味深かったことや質問、議題などをレポートに書いて提出した。学期の後半では、精神病と行動障害の中から1つ選んで、ろうと関連付けて調べて10ページ以上の小論文を提出、発表が行われた。私は摂食障害を取り上げたのだが、ろうを対象とした研究が非常に少ないことを初めて知り、聴覚障害児者の心理学がどれほど新しい分野か思い知らされた。改めて、聴覚障害者たちのニーズの大きさと研究の現状との差を感じた。このほか、人格障害は学齢期に診断を下していいものなのか、同一性障害は障害ではないのではないかなど考えさせられる議論もあり、大変勉強になった。

この授業は、日本での知識のおかげで理解しやすかったが、特に小テストで専門用語の英訳を覚えるのに苦労した。診断の練習では細かい情報に気付かず誤診したり議論に追いつけなかったりすることもあった。しかし、予習を心がけたり、発表でスライドや図表、導入を工夫したり、積極的に質問や議題を持ちかけたりしてできるだけカバーするようにした。さらに日本での知識があるとはいえ、あやふやだったり覚えていなかったりするところもあったので、この授業を通してきちんと確認しながら学ぶことができてよかった。

2. Principles of Statistics (3 単位)

心理統計の基礎的な知識からさまざまな研究でよく使われる検定、心理検査での応用の仕方を学んだ。数字やその公式がもつ意味、理論、その理由を1つずつ理解していくことはとても興味深かった。特に、授業が終わったあと日本語で確認するとき、これまでなんとなくでしか理解していなかった日本語での専門用語や理論が意味あるものとして頭に入ってきたときは感動ものだった。英語のほうが専門用語の意味がつかみやすいものもあり、二言語習得することの思わぬメリットを感じることもできた。

学期の後半では生徒による発表があり、心理統計の考え方をういた論文の紹介が行われた。この発表を通して、今まで心理統計と言えれば研究でしかなじみがなく心理検査での応用が今一つよくわからなかったのが、少しずつわかるようになった。心理検査の結果を分析して解釈するとき、その結果がどれほど信頼でき、どの解釈が一番妥当なのか考えるとき心理統計の知識が役立つのである。

先生はろう学生に教えるのが今回2回目で、わかりづらいことも多かったりろうに対する誤解があったり、さらには聴覚障害のある留学生の立場を理解してもらえなかったりしたが、教科書は1冊のみ、決まった答え、通訳者のフォローによりなんとか理解しながら取り組むことができた。

3. Psychological Development I: Learning & Cognitive Development (3 単位)

子どもの発達心理学を中心に、0歳から幼児向けの心理検査についても見ていった。特に関心を強くもってる言語発達では、子どもが文法のルールを見つける過程や新しい言葉を覚えるときの脳活動などに関するいくつかの理論を学び、興味深かった。

この授業では毎回章ごとに、生徒が交代で教科書の内容をまとめて発表・説明するのだが、精神病と行動障害の授業と比べて新しい専門用語が少なく日本の知識にも助けられ、英語やASLの理解に囚われることなく授業の本来の目的に集中することができた。先生もまた、心理検査を生徒に実体験させたりその道具で子どもどこの発達がわかるのか推察させたりするなど、わたしが理解しやすいように工夫して下さった。手話通訳を含め、わたしが一番リラックスできるコミュニケーション手段や会話の仕方をクラス内でできるように気も遣って下さった。子どものニーズに合った授業づくりを考える上で、この経験はとてもためになった。

4. American Sign Language IV (3 単位)

本当は ASL V を受ける予定だったが、定員割れとスケジュール上の都合で ASL IV に入るようになった。アカデミックレベルに少しでも早く上げたかったのが不安ではあったが、CL に集中した講義で視覚的な表現の仕方を鍛えるのによいクラスだった。

手話だけでなく、先生の話もためになった。先生自身はデフファミリー出身で、長男が聴こえる者として産まれたことをきっかけにろうに対する見方や考え方が変わったそう。例えば、ろう文化は聴こえなくて手話を第一言語とする者だけのものだと思っていたのが、手話が第一言語でろう者と同じ言動をとっているのに聴こえるというだけで息子が毛嫌いされているのを見て、ろう文化に聴力は関係ないという考えが変わったという。聴こえないことが悪いことではないのと同じように、聴こえることも悪いことではないと考えるようになったという。聴こえる文化とろう文化を併せもつ人はアイデンティティがあいまいだとネガティブに捉えられがちだが、先生は「違う、スーパーアイデンティティだ。幅広く客観的に物事を考えることができる。貴重な才能だとさえ思う。辛い立場でもあるが、こういう人たちこそろう社会と聴こえる社会の共存に必要なだ」とおっしゃった。コミュニケーション手段と自己概念がさまざまなろう・難聴児を対象に心理的サポートをしたいと考えている私にとって、このお話はとても励みになった。

次学期の目標

- アカデミック ASL と英語の表現力を鍛える。
- 心理・教育分野に関する語彙を増やす。
- 発達心理学、多文化教育、ろう心理学について学ぶ。